



久しぶりに友人に誘われて四ノ谷の写真展に行ってきた。直前に新聞に出たせいとか、平日の昼間だと言うのにたくさんのお客さんでにぎわっている。お客さんは年配の方ばかりなのだが、写真の芸術性と共に、水辺環境地求環境への喚起という一面もあり、写真を見る人たちは、一様に感嘆し、喜びの表情をしている。まあ、良いにとだ。確かに作品は自然の精緻な一瞬を捉えて、感動的に表現している。

ただ、それを見るこちらの目が乾いている。美しい写真はもう忘れるほど見てきた。もうあまり感嘆しなくなっているのだ。確かに写真を撮ることに熱中してのめり

こんだ時期は長かった。大枚をはたいて引き伸ばし機もライカも買った。ただ、今はもう熱が冷めている。今興味があるのは写真を見ている人たちそのものだ。この方達はなぜこんなに単純に喜べるのだろうかと言うことだ。美しいものに今なお素直に感嘆できるのかと言うことだ。長い年月を経て今なおそんな気持ちを持ち続けている人たちの輝きに感嘆する。それと同時に単純に感嘆できなくなってしまった自分をじっと見つめている。

その後、歩いて新宿近くの、私達がバングラで活動している会(日本下水道文化研究会)の事務所を目指す。いっしょに歩いている友人の建築士は都内の地誌、歴史に精通しているから、今はビルや道路で覆われていてなんの変哲もない街で、私達が今歩いている道が、江戸時代はどうだったのか、どういう地勢で、どんな流れや池があり、人々はどんな暮らしをしていたのか、それが時代と共にどう変わっていったのか、一足ごとに明らかになり、その歴史の証拠を求めて、踏地に入り込み、さまよった。何のことはない、かなりレベルの高い授業を現場で見せてもらって受けているようなものだ。もっとも、途中で公共の地域の資料館があったが、無料で公開している常設展示をしていなかったのだから、さささと出てきたのはまあ、しょうがないか。

事務所に着くと、バングラで活動している方たちが集まっていて、今年もよろしくと言いながらこれからの活動の方向などの話を聞いた。なんだか秋には神戸の大学で一日かけてなにがイベントをやるようなので、その計画やら、活動に聞きつけてきたテレビの人との話しやらと、盛りだくさんで、「で、今年はいつ行って、何するの?」と聞きたいところだが、どうもよくわからない。まあ、必要に応じて適宜水しかないのだろうな。それにしても、今年は町会の40周年記念事業や、選挙だってあるだろうし、町会長及び選挙の立会人としてはぶつかると困ることだ。パスポートも切れそうだから申請にも行かねばならんなどとうじうじ考えているうちに真っ暗になり、当然のように赤ちょうちんを目標してぞろぞろと進むこととなる。

飲み屋では、このあいだ冷え切った山中で、背中を丸めて「酒は熱間にかぎる。」とのたまった博士は、あっという間に通常バージョンに戻って、目をぎらつかせると「酒は常温だ!」と元気がいっぱい。さて、今年もこのように穏やかに始まりました。いい年になるのか、ならないのか?